

20世紀は『児童の世紀』だったのか？ エレン・ケイの
100年前の名著を現代保育に活かす道を明らかにする

最新刊

エレン・ケイ 保育への夢

『児童の世紀』へのお誘い

『児童の世紀』とは、エレン・ケイが新しい世紀のスタートを目の前にして、これからの時代こそ子どもたちにとって幸せな世の中にならなければ、という意気込みで執筆したことがよくわかる、見事なタイトルです。その願いにもかかわらず、20世紀は必ずしも子どもたちの世紀にはなりませんでした。

しかし、『児童の世紀』には、現代の保育や子育てへの素晴らしい示唆が、随所に散りばめられています。前著『倉橋惣三 保育へのロマン』に引き続き、荒井冽先生が今回はエレン・ケイの著作に取り組み、彼女の優れた思想・哲学を分かりやすく解説します。

激動の21世紀初頭に贈る、本当の意味での保育改革の道を明らかにする話題の本です。



(この本の内容)

- I 100年目に読む『児童の世紀』
わが道をゆく／自由な遊び／子どもと遊べる者／わたしの夢みる学校／いたずら／家庭生活の芸術家／二人の完全な幸福のもとで／根と花の相互関係／子どもの国よ そのままにてあれ／美しい糸を織り込む／自然の美や芸術の美／農家の小屋に点じた理想の光
 - II 読書ノート『恋愛と結婚』
性徳徳の発達過程／恋愛の進化／恋愛の自由／恋愛の選択／母となる権利／母性からの解放／社会における母性の役割／自由離婚
- 付 エレン・ケイをめぐる「青踏」のこと、カール・ラーションのこと

荒井 冽 (白鷺大学女子短期大学部教授) 著

A5判 176頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレーベル館